火野葦平「海御前」論
――北九州市門司区大積天疫神社の海御前伝説をふまえて――

増田周子

はじめに

火野葦平は、昭和十五年七月十日発行の『九州文学』（通巻二十二号）に発表した「伝説」（後の「石と釘」）を最初に、多くの河童作品を残している。その量は膨大で、ジャンルも、小説、童話、エッセイなど多岐に亘っている。火野にとって河童作品とはどんなものだったのだろうか。自身の作品を集めた『河童曼陀羅』の「後書　河童独白」で火野は次のように述べている。

私はけつしてカツパを片手間に書いたわけではなく、どんな短い作品にも打ちこんで取り組んだし、すこし大仰にいへば、一つのカツパ作品ができあがることは、五百枚の長篇が完成されると異らないほどのよろこびであつた。そして、いま思ふのである。毀誉褒貶はともあれ、これは、たしかに、私のライフ・ワークの一つである、と。[1]

火野にとって、河童作品群は、自身がずっと打ち込んできた、貴重な作品群なのである。だが、戦争作家として著名な火野の河童作品は、これまでほとんど論じられることがなかった。火野の河童作品は、決して余技でも「片手間」仕事でもなく、火野文学を研究するうえで、重要な位置を占める。

そこで、本稿では、北九州の平家伝説をもとに創作した、火野の河童作品「海御前」をとりあげ、伝説を紹介し、作品の素材となった『平家物語』とその改変の様相をふまえながら主題や作品に込められた意味について論じていきたい。なお、「海御前」は、調査のかぎりでは、これまで、論じられたことがなく、同時代の評や先行の論考は見当たらない。

一、「海御前」の成立

a「海御前」書誌

「海御前」は、昭和二十六年一月一日発行の『文学界』（五巻一号）に発表された短編小説である。葦平生前の「海御前」収録本を次にあげておく。

一、『かっぱの皿』（昭和二十七年十二月一五日、学風書院）
二、『蕎麦の花』（昭和三十年六月三十日、河出書房）
三、『河童曼陀羅』（前掲書）
四、『火野葦平選集　三巻』（昭和三十三年七月三十日、東京創元社）

なお、収録本には特に目立った加筆修正はない。よって、本稿では『河童曼陀羅』収録の「海御前」をテクストとして用いる。

b　火野葦平「海御前」のもとになった北九州地方の伝説とゆかりの神社

まず、考察にあたって「海御前」の内容を簡単に確認しておく。

「海御前」は、女河童の語りで話される作品である。女河童は、もともとは平家の侍大将能登守教経の妻であった。壇の浦の戦いで、平家一門は源氏に敗れ、この戦いを終焉として、平家の一族はみな海底に身を投げて死んでしまった。教経も、その妻も水底に沈んだ。そして、平家一門の男は平家蟹となり、女性は河童となって生まれ変わったのである。そして教経の妻は河童の首領となり海御前様と呼ばれるようになった。海御前は、壇の浦に住む河童達がやる気を失っても、大積の海底にうつり、大積の海底を拠点とし、源氏への復讐に燃えていたのであった。だが、七百六十年後、源氏がとっくの昔に滅びていたことを知って失望し、壇の浦に戻っていく。

以上が、簡単な「海御前」の内容である。さて、「海御前」のもとになった伝説とはどのようなものであろうか。須田元一郎は「九州北部の伝説玩具」で次のように記している。

> 水天宮と河童の関係に就ても、一つ忘れる事の出来ぬ伝承が豊前にある。企救郡松ヶ枝村字大積に天疫神社といふ祠がある。こゝは、平家の大将能登守教経の奥方が、壇の浦の戦で破れた時波間に投じ、こゝの海辺に流れ附いたのを、里人が祀つたと謂れてゐる。この女が神となつて、海御前様と呼ばれ河童の総元締になつた。五月節句に河童共を集めて、蕎麦の花の咲かぬうち戻れ（蕎麦の花は源氏の白旗の様に白いから）敵方（源氏）にあらざる人畜の命は、無暗にとつてはならぬと厳命してから解散する。是れから彼等は、思ひ〳〵に山間水辺に遊び廻り、秋口蕎麦の花の将に開かんとする頃、一同山に引き上るのだと云ひ伝へてゐる。久留米の水天宮では祭礼の前に、この大積の天疫社へ参拝使が立つて供物を供へたさうであるが今は絶えた。然し、古老の内には未だ

其実見者が残つてゐる由である。[2]

さて、ここに出てくる天疫神社とはどこにある神社であろうか。この神社は、現在も福岡県北九州市門司区大積一二七二にある大積天疫神社で、北九州市門司区の観光協会のホーム・ページには次のようにこの神社について記している。

元の「大積天疫神社」の創建については不明ですが、「丸山城主、大積上聰介隆鎮（おおつみかずさのすけたかしげ）の守で、世に大積殿と称した。落城後、大積村人の尊崇厚く、正保三年（一六四七）今の社地に移し、大積村鎮守社とした」と「大積村志」に記してあります。[3]

すなわち、十七世紀中ごろには、すでにこの神社はあつた。境内の隣に水天宮があり、そこには、河童の証文の碑や、海御前の墓、河童の像などがある。火野は、北九州地方の生まれであるので、当然、平家が滅びて、男は蟹に女は河童になったというこの伝説を知っており、そ



大積天疫神社横　水天宮


大積海岸

して、教経の妻が大積の海辺へ流れ着き、大積天疫神社に祀られていることも周知していたはずだ。また、火野は、『河童漫筆』で、

私は特別に研究をしたわけではないが、河童文献といえば、すぐにでも、「甲子夜話」「和漢三才図絵」「本朝食鑑」「利根川図誌」「善瀧庵筆」「三養雑記」「物類称呼」「ありのまま」「訓蒙図彙」「倭訓栞」「日本山海名物図絵」「水虎奇譚」「本草記聞」等が頭に浮かぶ。あらためてしらべる段になると、この何倍ものものが出て来るにきまっている。(4)

と述べている。火野は関心を持って『甲子夜話』などの河童にまつわる記述を読んだり調べたりしていたに違いない。この海御前伝説の話も熟知していたのであろう。これらの、北九州地方にまつわる伝説をもとに、火野は河童小説「海御前」を創作したのである。また、大積天疫神社の境内には次のような「大積と河童」という立て札が昔立てられていた。すこし長いが、引用してみる。

源平のいくさ、壇浦合戦で入水した武士たちは平家蟹となり、女官たちは河童に化したという伝説がのこされている。「海御前」は能登守教経の奥方で、教経最期を「平家物語」は「いざうれ、さらばおれら死途の山のともせよとて、生年二十六にて海へつとぞいり給ふ」と記している。伝説はここから始まる。お伽噺が歴史の外の出来事であるのに対し、伝説は歴史の内の出来事であることに意味があるといわれる。海御前が河童の総帥である所以である。水天宮と河童がどうむすびつくかは忘却の彼方に埋れた民俗信仰の課題であり、明らかな史実は大

積水天宮が、久留米水天宮の本宮であったことである。大積が河童の本家であることは一九五六年一月十五日、旧門司が火野葦平を請じてこの現地で手を打ってきめた事実に基づいている。「海御前の墓石なでれば時雨来る」これがその時の自作で「あしへい」と署名してある。(5)

この立て札にも、先に須田が記したことと同様の、「海御前」伝説が記されている。また、平家蟹の由来にもふれている。ここで注意しなければならないことがある。一般的には源氏軍に追い詰められた平家一門が壇の浦で入水自殺をした後、男も女も蟹になり、赤い甲羅に人面相のようなものが浮かび上がっている蟹が、下関や門司の海岸付近で見つかることから、平家の無念さや、その怨霊が化身となって表れたものであるとして平家蟹と呼びならわされるようになったというのが通説である。(6)だが、この大積海岸付近の伝説では、平家の男は蟹に女は河童になったとされている。さて「大積が河童の本家であることは一九五六年一月十五日、旧門司が火野葦平を請じてこの現地で手を打ってきめた事実に基づいている」とあるのは何を示しているのであろうか。火野は「三十年ぶりの門司」に次のごとく記している。

私の住んでいる若松から門司までは、三、四里しかない。北九州五市合併論がさかんであるから、そうなれば一つの市内である。その門司に私は最近行つて、変化におどろいた。その序に、和布刈の方に回り、あまりに昔日の面影と変つていることに一驚したのである。考えてみると、和布刈神社に行って以来、三十数年ぶりであつ



「平家蟹」下関
赤間神社所蔵

た。

若松では毎年カッパ火祭をやつている。高塔山の頂上にあるカッパ封じの地蔵伝説をもとにして、私は「石と釘」という作品を書いたが、祭もその伝説にもとづいておこなわれる。それにちなんでカッパせんべいや、カッパ手ぬぐいも売り出している。すると、門司の方から、カッパは門司が本家であるといいだした。しかし、そんな本家争いはおかしな話で、門司の海御前が女カッパの本家であることは、私たちのつとにみとめているところである。男カッパの本家は筑後川の九千坊であり私たちは若松カッパを本家と思つたことなどは一度もない。しかし、私は女カッパの総帥である海御前の住居を訪れたことはなかつたので、先日、敬意を表しに行つたのである。(7)

火野は、昭和二十九年に「戦後のすさんだ世の中を明るく照らそう」と、高塔山の頂上で河童達を招待する「かっぱ祭り」を始め、これに賛同した多くの人々が、高塔山を目指し、たいまつを掲げて登る「たいまつ行列」をおこなった。「かっぱ祭り」と「たいまつ行列」をあわせて「火まつり行事」と言われている。現在でも火野が提唱し、おこしたこの祭りは、北九州市若松区で続けられている(8)。昭和二十九年ごろから、人気作家の火野が、河童の本家はいかにも若松だと言わんばかりに、派手な河童行事を始めたがために、門司の方から批判が出て、「カッパは門司が本家であるといいだした」。火野は、もちろんそんなことは承知だと言う。そして、三十年ぶりに門司を訪れた。昭和三十一年一月十五日に大積天疫神社を訪れ、女河童の住まいを視察し、敬意を表したのであった。その時の様子を火野は次のように綴る。

大積は門司市街の裏手にあたるさびしいところであつた。ここの海岸に、能登守教経の奥方が屍体となつて流れついたのを、村人が厚く葬つた。海御前はその化身だということになつている。

悲壮な源平合戦はさまざまの美しい物語を生んでいるが、一ノ谷、屋島、壇ノ浦、と西へ西へと逃がれた平氏も、ついにここで亡び、海底に沈んだ男たちはヘイケガニとなり女官はカッパになつたと伝えられている。その多くの女カッパたちはすべて海御前の指揮下にあるわけだ(9)。

火野は、まず教経の奥方の死体が流れ着いた大積の海岸を訪れ、古の源平の戦いに思いをはせていた。続けて、大積海岸の近くの天疫神社に行き、「海御前様」と書かれた碑を見た印象について次のように述べた。

海辺からはすこし離れたところに、天疫神社がある。ケヤキの大木や松がまばらに生い茂つていて荒れはてたままである。しかし、この社はカッパとは関係がない。

境内の一角に「海御前様」と彫られた赤間石の碑がある。すこし立派すぎるなと思つて、裏を見ると「昭和三十年建之・弥作書」とあつた。弥作というのは東郷村最後の村長とかいう話だつたが、この新品のカツパ碑は私にはあまり風情がないように思われた(10)。

ちなみに、昭和三十年に、東郷村最後の村長の弥作が彫った海御前像は次のものである。確かに昭和三十年に作られただけあって、いかにも新しい気がする。さらに火野は、ほんものの海御前の碑を見て、このように記した。

ほんものの碑はそのすぐ横にあつた。タイ積した地層がはみ出ている水成岩の自然石で五輪塔の形をして居り、その古色蒼然とした趣がなんともいえない。しかし上半分は欠けてなくなつたとみえ上部はやはり赤間石で補修してあつた。これは教経夫人の死を悼んで土民が建てた墓であつたわけでいつごろから、海御前という女カッパ頭目の碑に変つたのであらうか。いずれにしろ、平家滅亡の悲愁が、立ちこめていて、私は立ち去りかねた。すると、これまでよく晴れわたつていた青空に、私のいる真上だけ黒雲があらわれ、バラバラと雨が落ちて来た。私は長大息した。それはカッパの友である私を歓迎して海御前が雨によつて挨拶をしたものにちがいないと思つたからである。私がそこを立ち上ると、たちまち雨はやみ、ふたたび青空があらわれた。(11)



弥作作「海御前像」



「海御前の碑」



「海御前」河童像

火野は、ほんものの海御前の碑を見たとき雨にほんの少し降られるという不思議な体験をし、それは海御前が自分を歓迎し挨拶してくれたのだと感じた。その不思議な体験が、火野の創作意欲を書き立てたのであろうか。火野はすぐに、先にあげた「海御前の墓石なでれば時雨来る」の句を創り、そして、この日、「大積が河童の本家である」ことを、自ら確信したのであった。

二、「海御前」の冒頭

ここからは作品「海御前」について考察していきたい。本作は、先にも述べたように、海御前の回想の語りで構成されている。平家滅亡から七百六十年の歳月がたっていた。海御前は、倦怠に浸りきった平家一族から逃れ、壇の浦から大積海岸に移り住んで、源氏への復讐を考えていた。ある日、海御前は「夕焼雲のあまりの美しさに、ただうつとりみとれてをり」、赤旗を棚引かせた誰かに「足もとから強い力で引つぱられ」、「たわいもなく引きこまれて」しまった。そこは、暗く、「異様な臭気」のする「息苦しい」蜥蜴や土龍がたくさんいる場所だった。「遠い人間の屍のやうないやなにおひ」がしていて「じめじめ」していた。この場面から、小説は始まる。海御前は、「正直、はじめ、いきなりここへ引つぱりこまれたときにはびつくりいたしました。」という。ただ、その後はすぐ、

あなたがたのような味方に今日めぐりあへたことは、あたくしの幸福でございます。平家も壇の浦滅亡以来、ちりぢりばらばらになり、源氏のきびしい追討の眼をのがれて、全国いたるところの山間辺陬の地にかくれ棲むやうになつてから、早々数百年が経ちました。時間の魔力が忘却を強ひたとて、なんの不思議がございませう。あなたがたがあたくしのことを知らなくなつてゐたとて、お恨みはいたしません。お望みにしたがつて、お話しい

たしませう。さすればあたくしの今日までの復讐の悲願も、あなたがたの理解と協力とを得て、さらに力づよいものとなりませう。（「海御前」三一二頁）

海御前は、引き込んだ相手が平家の旗印色の赤旗を棚引かせているので、勝手に味方に出会えたと思っているのである。そして、夕焼雲に見とれていた理由を次のように語る。

あたくしが夕焼雲に見とれてゐたのは、あたくしが詩人であるとか、あの女学生趣味の感傷にとらはれてゐたのではありません。あの巨大な真紅の旗、空全体が一旒の赤い旗になつたような神秘、奇蹟、憧憬と歓喜、歴史がつねにその真実としてつたへてきた回想の正しさ、さういふものにあたくしの全精神をふるはせてゐたのでございました。真紅、赤い旗こそ、あたくしの命です。（「海御前」三一二頁）

このように述べ、自分がどのような経緯を辿って、海御前という河童になったのかを語り始めていく。こうして海御前の回想の物語が描かれる。

三、「海御前」と『平家物語』

さて、ここからは、源平合戦の物語、『平家物語』との相違をふまえながら作品「海御前」を追っていきたい。この話は、先に指摘したように、河童となった海御前の語りで進められる。海御前は、自分達平家が負けたことについて次のように語る。

あたくしは平家の侍大将能登守教経の妻のなれのはて、いまは海御前とよばれてゐる者でございます。（中略）沈む太陽を扇をもつてよびかへしたほどの権勢に、永い夢を見てをりました平家も、あの関東の暴力団、源氏の理不尽な攻撃に潰えましたが、その無念をばやるかたなく、その怨霊は今日まで、男は蟹となり、女は河童となつてのこつております。ところが不甲斐ないことに、かれらは現在は関門海峡のはげしく潮流の鳴りはためく海底に、ただ淫逸無為の日をおくつてゐるばかりでありまして、せつかく怨霊として再生しましたのに、いつこうに雄々しく復讐のためたたかふ気配もありません。

（「海御前」三一一～三頁）

前々章で説明したように、平家の侍能登守教経の妻は海御前となり、平家方の「男は蟹となり、女は河童」となったという伝説と同じ話が海御前によって語られる。続いて海御前は次のように語る。

あの平家蟹とよばれ、背の甲羅の紋様に無念の形相をたたへてゐる男たちは、賤しい漁師の手に埒もなくとらへられ、売られたり、食べられたり、剥製にされて飾りものになつたりしてゐる始末です。門司の突端、壇の浦口にのぞんだところにある和布刈神社の境内には、あたかも平家の腰抜けを嘲笑するかのやうに、巨大な平家蟹の剥製が、絵馬堂にたかだかとかかげられております。ああ、なにをかくしませう、それこそあたくしの夫、かつてその勇猛をうたはれ、平家の花とたとへられ、壇の浦の合戦においてあの源氏の大将九郎判官義経をすんでのことに生けどりにしようとした能登守教経のかはりはてた姿なのでございます。

（「海御前」三一三頁）

海御前は、教経は、海に沈んでからは、生前とは違い「かはりはてた」という。ここにある和布刈神社とは、福岡県北九州市門司区大字門司三四九二番地にある関門海峡のちかくの神社である。仲哀天皇（西暦二百年頃）に創建され、毎年冬至の日に若布繁茂の記念祭をすることで有名である。[12] ここでは、かつては勇猛果敢であった能登守教経が平家蟹の剥製となり、和布刈神社の絵馬堂に晒し者にされて飾られているとなっている。もしかすると以前は巨大な平家蟹の剥製が飾ってあったのかもしれないが、平成二十八年に筆者が訪れた時には飾ってはいなかった。

さて、海御前の夫である能登守教経とはどんな男であったのか。『平家物語大事典』[13]には、次のように説明される。教経は、平野教盛の二男。元の名は、尊卑分脈では国盛であったが、治承二年（一一七八）に越前守、この後教経と改名。『吾妻鏡』によると、寿永三年（一一八四）二月七日の一の谷の合戦で、甲斐源氏の安田義貞に打ち取られたとするが、それは別人と考えられ、元暦二年三月、檀の浦で自害したとされる。巻八・水島の合戦で源義仲軍を破ったことでも有名である。「常に劣勢な平家軍の中にあって、起死回生の力を秘めた能動的人物」[14]であったとされる。平家「勢力挽回の大きな契機」となった巻八「水島合戦」では教経は源義仲軍を破り、巻九「六ヶ度軍」では、備前の下津井、淡路の福良、安芸の沼田、摂津の西宮、和泉の吹井、備前の今木ですべて勝利をおさめたとされる。勇猛果敢な武将であった。その他巻九「老馬」「坂落」巻十一「嗣信最期」「能登殿最期」[15]などに登場する。そのうち、「海御前」では『平家物語』巻十一「能登殿最期」の合戦を描いた箇所を用いている。また、教経は登場しないのだが『平家物語』巻十一「那須与一」「弓流」も使われている。



和布刈神社

a『平家物語』巻十一「那須与一」「弓流」と「海御前」

本作には『平家物語』から那須与一が扇の的を射る名場面とその後男を射殺す場面が用いられている。その個所は巻十一「那須与一」と「弓流」の一部であるが、要約すると次のような話である。

讃岐屋島へ逃れた平家を追いかけた義経の軍勢と平家軍は、寿永四年（一一八五）二月十八日激しく戦闘を繰り広げていた。日が暮れたので、両軍ともに兵を引こうとしていると、沖の平家側の方から見事に飾った小舟が一艘漕ぎ寄せてきた。十八、九歳の柳の五衣に紅の袴を着た若い女房が舟の中から出てきて、紅地に金色の日輪が描かれた扇を竿の先にはさんで立て、陸の源氏に向かって手招きをした。義経は、弓の名手、那須与一宗高に扇を射抜くよう命じた。扇の的までは、四〇間余り（約七〇メートル）あった。北風が激しく吹き、扇の的は小舟と共に揺れている。与一が南無八幡大菩薩他の神に念じると風が弱まり、力を込めて鏑矢を放った。見事に扇の要近くに命中した。扇は空へ舞い上がり、ひらひらと散った。これを見ていた源平両軍ともに与一の弓の見事さに感動して歓声をあげたのであった。この話は、広く知られた『平家物語』での名場面である。その後『平家物語』巻十一「弓流」では、与一が船で舞をはじめた男を射落とす場面が記され、源氏は感興したが、平家は静まりかえった話が描かれる。「海御前」では、この那須与一の扇の的を射るエピソードの後話が記されている。

一の谷で、那須の与市が船上の扇を射おとしたあと、この関東の荒武者は、図に乗つて、しきりと拍手喝采してゐる平家の一老兵を、つづいて射殺しました。なんといふはしたないわざでありませう。それまで、みごとに扇のかなめを射た妙技に、敵も味方も舷をたたいてやんやと褒めそやしてゐましたが、このことのために、海上に浮かぶ平家の軍船ははたと沈黙し、味気なく白けはてた空気のなかに、この弓の名手にたいする軽侮と憎悪の

感情がながれました。しかし、陸にゐる源氏の軍勢はさらに喝采のどよめきをつづけてゐます。あたくしは夫教経とともに歯をくひしばるやうにして、その光景を眺めてをりました。その射ころされた老兵といふのが、ほかならぬ夫の古く忠実な郎党であつたからでございます。

（「海御前」三一三～四頁）

『平家物語』には、男としか記されないが、「海御前」では、与一が殺した男を教経の「忠実な郎党」と設定し、それに対して平家軍勢が「軽侮と憎悪」の感情を持ち、座がいっぺんに白けたことが記されている。そして、『平家物語』には書かれていない次の物語を描いている。

那須の与市は意気揚々として、馬をいそがせ、渚にかへりました。そして肩をいからし胸を張る歩きかたで、大将義経のまへへ伺候しました。さぞかし晴れがましいお褒めの言葉と、なにかのすばらしい引出物でもあるかと期待したものでせう。ところが与市のあてはみごとに外れました。（中略）大将の義経がすこぶる不興で、褒めるどころか、したたかに与市を叱りつけたにちがひないことは遠目にもそれと知れました。扇を射おとしただけでかへつて来たならば、与市は胴あげされるくらゐに歓迎されたでせうに、大将の義経が与市を武士道を知らぬ者としておこりつけましたために、部下の兵隊たちもはや拍手をするどころか、すごすごと与市が御前を下つてまゐりましても、慰めようとする者すらなかつたのです。

（「海御前」三一四頁）

「海御前」では、義経が武士道を知らぬ者として与一を叱責するシーンが加えられている。海御前は、「あたくしはこれを眺めてをりまして、ああ義経といふのはなんといふ立派な大将であらうかと、思はずためいきが出た」と述べ

る。また『平家物語』巻十一「弓流」には、義経が海に弓を流してしまい、部下から止められようとも敵に義経の弓が拾われることを恥じ、拾い上げるエピソードが綴られている。そのことを踏まえて、作中では、

義経がながれた弓を拾はうとして、危険におちいり部下からたしなめられたとき、叔父鎮西八郎為朝のやうな強弓なら、こちらから好んでながして拾はせてもよいが、この弱弓が源氏の大将義経の弓かと笑はれるがいやさに、危険ををかして拾つたのだといふ話をきかされたときにも、あたくしの胸の奥の琴線は不思議な感応をうけて、ふるへるやうに鳴りました。

（「海御前」三一四頁）

こうして、教経の妻は、義経の武将としての殊勝な姿を見てだんだんと、源義経に惹かれていくのである。海御前は、「めざましかつたのは壇の浦でございます。陣頭に立つて指揮する義経の美しい武者ぶりを、あたくしはなんど惚れ惚れと眺めましたでせう。あつてはならぬこと、してはならぬこと、敵将へのこのやるせない慕情、あたくしは運命の神をうらみ、身も世もあらぬなげきにいくたびか涙で袖をぬらしました。」と回想する。

はじめはなにも知らなかつた夫教経は、かよわい女であるあたくしがはげしい合戦と敗亡の悲運のなかで、神経衰弱になつたのだときめ、しきりとあたくしを慰めてをりましたが、そのうちにあたくしの真意を気づいたやうです。するとはげしい嫉妬が夫をさいなんで、にはかにあたくしに邪慳にあたるやうになつたと同時に、その憎悪が一途に敵将義経ひとりにそそがれるやうになりました。このために夫の勇猛さはさらに加わり、合戦のたびに義経を目がけて殺到しましたので、一時はこのために味方の志気もふるひたつたほどでした。

（「海御前」三一五頁）

海御前によると、教経はとうとう、妻が義経に憧れ、恋をし始めたことに気づいて、嫉妬に狂いはじめたのであった。

b『平家物語』巻十一「能登殿最期」

さて、平清盛の娘建礼門院は、もう駄目だと袖に石を入れ壇ノ浦に沈んだが、源氏方に熊手でひきあげられた。平教経は、源氏の総大将の源義経を討とうと、義経の舟に飛び乗り義経と相対する。だが、義経は、軽々とおよそ六メートルほど離れた別の舟に飛んで逃げた。周りを源氏の武将にとり囲まれ、教経が「もはやこれまで」と覚悟する場面が、『平家物語』巻十一「能登殿最期」にはある。作品には、このエピソードも使われている。海御前は次のように回想する。

あのときの合戦は忘れられません。彼我の軍船は舷を接し、兵隊たちの雄たけびと、剣、槍、弓矢などのかちあふ音、法螺貝と陣太鼓の狂ほしい合奏、荒れる壇の浦の海は青く、数十旒の赤旗と白旗とが風にひるがへつて、その凄絶のありさまはとても口では伝へられません。そのとき、瞋恚の眼に嫉妬のほむらをたぎらす夫教経が宿願を達して、目的の義経に近づき、その鎧の綴をつかんだのです。あたくしはそれを見てゐまして、思はず眼をとじ、舷側に膝まづいて神に念じました。ことの善悪、是非、曲直を問うてなんになりませう。それは不倫でせうか。夫ある身が夫の成功を願はずして、かへつて敵の安全のために祈つたとは、しかしそれこそは女の偽りな

い神聖な恋の感情でした。（「海御前」三一五頁）

海御前は夫ある身でありながらも、義経に「神聖な恋」の感情を抱き、教経の無事よりも義経の無事を祈った。教経はまた、嫉妬に狂い、平家のためにも自身のためにも義経を殺そうと殺気立ち、必死だった。

ふと眼をひらいたとき、青空を背景にして、義経が空間をとんでゐる姿を見ました。美しい飛鳥の姿でした。緋絨の鎧がきらきらと陽にかがやいて、それはあたかも極楽にゐる迦陵頻伽かと思はれました。義経は教経の手に鎧の袖をのこして、別の船にとびうつつたのでした。それは義経の八艘とびとよばれてゐますけれども、多分四五隻であつたでせう。それとも鞍馬山で天狗に飛行の術をならひ、京都の五条橋で欄干から欄干へとびうつつて、さすがの武蔵坊弁慶をへこたれさせた人ですから、ほんとうに八隻の船をとびこえたのかも知れません。（「海御前」三一五頁）

教経の妻は、「義経の安全を知つて」「安堵の胸をなでおろし、神に感謝し」た。

そのときあたくしは突然はげしい力で舟底にたたきすゑられました。夫教経の怒りのために朱泥となつた顔が眼前にありました。夫はあたくしが敵のために祈つたことを知つて、あたくしを半殺しの目にあわせました。

そして、結末がまゐつたのでございます。（「海御前」三一五～六頁）

こうして、「亡びた平家は壇の浦の海底に、男は蟹となり、女は河童となつてわづかに残るだけ」となった。海御前は「全国の山間僻地にのがれた残党は、三族までも根だやしにする源氏のきびしい追討で大半は殺され、その幸運な少数の者が人跡未踏の奥地に哀れな小さな部落をむすんで、世を忍んでゐるにすぎません。さうして、あたくしは多くの女御たちと運命をともにし、河童となつて壇の浦の海底に棲む身となつたのでございます」と述べる。もちろん、『平家物語』には教経の妻が、嫉妬した教経自身に「半殺しの目」にあわされる場面などない。また、海御前は次のようにも語る。

> 夫教経は蟹となつてからも、しつこくあたくしの不倫を責め、あのとき義経をとりにがして勝利の契機を逸したことがあたくしの罪のやうにいふのです。お前の浮気が平家を亡ぼしたといふのでございます。そしてそのあとではふいにあたくしの機嫌をとつて、あたくしを求めようとする。あたくしはもうそのうるささ、いやらしさに耐へがたくなりました。
>
> （「海御前」三一六頁）

すなわち、教経の敗北、そして、平家の敗北は、海御前が義経に浮気心を抱いたために、教経が咄嗟の判断を誤って義経を取り逃がしたためだと作品では描かれる。海御前は「あたくしが思い出ぶかい壇の浦をすてた理由のひとつに、うるさい夫の焼き餅がありました。」という。そのうえ、蟹となった男たちや河童となつた女たち等平家一門の者どもは次のような様子だった。

> 夫をはじめとする蟹たちはもう戦ひは倦き倦きしたといひ、かへつて蟹となつて海底で平和の日の送れるやうに

なつたことをよろこんで、ときにぶつぶつとだらしない泡をふいて、昔の栄華の日を未練がましく語りあふだけです。その不甲斐なさは女であるあたくしの胸をはがゆさで煮えたぎらせるのでした。河童になつた女は女で、三々五々、群をなして陸のうへを遊び呆けることに熱中し、くやしげな渋面を背の甲羅にのこしてゐる男の蟹たちをなぐさめることもせず、あちこち飛びまはつてゐますが、秋になるとまつ青な顔をしてふるへながらみんな海底へかへつてきます。彼女らはなにより源氏の白旗がこはいので、その敵の旗におどろいて逃げかへつてくるのですが、なに、それは敵の白旗でもなんでもなく、蕎麦の白い花なのです。あきれた臆病といふほかはありません。

（「海御前」三一六頁）

蟹になった平家の男武将たちは戦争がいやになり、河童となった女たちは臆病で、源氏の白旗を常に恐れていた。こうして海御前はとうとう「壇の浦の海底を脱出」したのであった。この作品中の描写は、

毎年五月の節句になると、御前様は河童族を集め「今日からお前たちを自由にしてやるから、白いものや笹に関係あるものに出会ったら、水中に引き入れてしまえ、ただむやみに人間や畜類の生命をとってはならない。秋風が吹き出して涼しくなりソバの花が咲くころ、急いで戻ってこい」と、解放された河童族は、思い思いに川や池のほとりに出かけ、源氏に関係のある者に害を加えて、秋に帰ったときに恩賞を受けることになっていた。（源氏の旗は白で、家紋は笹リンドウ[16]）

という実際の海御前伝説を踏まえていると考えるが、作中では平家の女官たちは臆病で白旗に勇敢に立ち向かうことができないと設定されている。

実際は、平家一門は、ほとんど現在の山口県下関市の壇の浦の海岸で沈んだのであるから、その周辺に生息するのが普通であるが、教経の妻の海御前はそれとはずいぶん離れた場所の、北九州市の裏門司の大積海岸に流れ着いたとされる。火野は、この地理的な距離の不思議さから、思いついたのだろうか。海御前が自然に大積海岸に流れ着いたという伝説を改変し、彼女が大積海岸に住み着いたのは、夫の焼き餅と嫉妬からくる執拗な責めに耐え切れなかったことや、平家一族の男も女も、源氏に復讐しようとする意欲を失っていることに不快感を覚えたからとする。こうして、海御前は壇の浦を意識的に去ったのであった。

三、海御前の復讐の思い

海御前は、こうして、「大積の海底に棲み、阿修羅となつて、源氏への復讐のため方々を荒しまはるやうになり、その勇猛さのために、いつか誰からともなく海御前とよばれるやうになつたのでございます。」と述べる。海御前だけが、勇敢にも源氏への復讐を考えていた。海御前は、教経が漁師に捕らえられ、「和布刈神社の絵馬堂にさらしものになつてかかげられた」ことに対して次のように言う。

夫はあたくしの出奔以後、魂がぬけたやうになり、失恋したといつてなげきかなしんでゐたとのことです。それでわかりました。それでなくては、驍将義経をあはやとりひしがんとした敏捷の教経が、どうして愚鈍な下賤の漁夫などの手に負へませうか。ふらふらと気が抜けたやうになつてゐたにちがひません。あたくしはそれを知る

と、やむを得なかつたとはいへ、あたくしが自然にいつしかをかしてきた罪といふものを考へずにはをられませんでしたが、（中略）失恋ですつて？　失恋といへば、あたくしも同様です。あたくしの生きる命の灯であつた九郎義経は、兄頼朝からにらまれ、どこか遠い奥羽の方へのがれたきりで、まつたく消息を知りません。殺されたという風評もあり、蝦夷地へわたつて蒙古の方へ行つたといふ説もあつて、真偽のほどをたしかめ得ません。はつきりわかつてゐることは、もう絶対に義経を見ることができないといふこと、あたくしが失恋したといふことです。あたくしはもはや青春を暗黒のそとへ放りだし、いまはただ復讐の鬼となつてゐるのです。

（「海御前」三一七頁）

ここにあるように、失恋をした海御前は、「青春を暗黒のそとへ放りだし」、甘い気持ちをすっかり捨て去り、源氏への復讐に心を燃やしていた。河童となった海御前に怖いものはなかった。河童には神通力があり、水中、陸、空すべてを縦横無尽に「自由に翔ることができ」るし、「馬でもトラツクでも機関車でも河中にひきこむだけの膂力をもつて」いた。そして次の如く述べる。

あたくしの攻撃を避けるために、人間どもはさまざまの防禦法を講じてゐますが、そんなものはなんの役にも立ちません。

（「海御前」三一八頁）

こうして海御前は、自信をもって大積海岸付近に生息し、源氏への復讐の機会を見計らっていた。

四、海御前の失望と平和への希求

作品は、海御前が一通り回想を話した後、冒頭と同じ、海御前が赤旗を棚引かせた誰かに大積海岸とは別の場所に引き込まれた場面へと戻ってくる。平家の旗印の赤旗については、海御前は次のように誇らし気に語っていた。

いつ見ても、赤旗はすばらしい。あたくしたちの衿持の旗、燃える真紅の旗、名門の名残りがふくよかにこもる美しい旗、あたくしはここへ引きこまれた刹那に、それを見て、もう歓喜で胸がふくれたのです。あたくしは復讐の鬼となつて以来、勇気は凛々としながらも、孤独のさびしさには折々おそはれて耐へがたくなることがしばしばでしたが、今はもう寂しがりません。こんなに多くの味方ができたら、あたくしの復讐の悲願成就も近きにありませう。ふたたび平家の時代のくることも夢ではなくなりました。

（「海御前」三一八頁）

先にも述べたように、海御前は、勝手に引き込んだ相手を味方と思い込んでいる。そして、源氏への復讐が達成すると思っているのである。しかし、海御前の考えに反して、小説は次のように展開する。

え?……自分は平家ではない、つて? それでは、なんです? なんでございますの? そんなに平家の旗じるしをたなびかせてゐるあなたが、平家ではないなんて。それでは、その旗はなんの旗です。

人民の旗ですつて? それはどういふ意味です? あたくしにはわかりません。わかりませんわ。おどろかさないで下さいまし。赤旗は貴族の旗の筈です。平家は教養たかい貴族です。白旗こそ、人民の旗です。源氏こそ

関東の野武士、暴力団、みんな無頼漢、いいえ、源九郎義経をのぞいた以外です。（中略）……なに？　源氏などはもうゐない？　それはずつと古い時代の話で、とつくの昔に亡びてゐる？……　馬鹿な。源氏がいつ亡びたのです？……　そんな筈はない。ほんたうですつて？

（「海御前」三一八～九頁）

河童となって暮らし、七百六十年も経った今となっては、平家だけでなく源氏も滅亡し、源平の時代は終わって、「昭和の現代は高度な文明の世の中になつてゐる」と教えられた。海御前が平家の旗だと思っていた赤旗は、「人民の旗」であった。

源氏へ復讐するなどといふやうなことは、無意味なうへに荒唐無稽といつてよいほどのことで、そのために人民が迷惑してゐるだけのこと。それより、その神通力を別途に有効に使つた方がよい。自分たちは人民の幸福をねがひ、革命を企図してゐるが、弾圧がきびしくてうまくゆかない。それで願はくば、その神通力を自分たちに伝授して欲しい。それが赤旗へ郷愁を感じ誇りを持つあなたの真の慰めになるだらう。平家の旗じるしであつた赤旗の勝利はあなたも願ふところにちがひない。同じ追放者のよしみ、これを機会に、あなたの術を……

（「海御前」三一九頁）

このように、海御前の神通力を、人民の旗、すなわち共産党の革命のために使わせてほしいと頼まれる。驚いた海御前は、「とんでもない。なにをおつしやるんです。もう聞きません。これ以上、無用です」と述べる。さらに、海御前が連れてこられたところは地下だと教えられた。

海御前は、「もう用なんかありません」と引き留めるのを振り払った。海御前は、身体中の気力が抜け落ち、頭のなかが空洞になったようであった。「歴史といふ恐しいやつにいつぺんでやられた」と言う。そして最後海御前は次のように考える。

もう、企救の大積にかへるのは止さう。あそこは復讐の拠点だつたので、すべてを知つた今はゐづらい。壇の浦の海底に行かう。たとひ、そこで、倦怠のはて発狂することがあるとしても。（「海御前」三一九～二〇頁）

海御前が戻ろうとしている、作中の壇の浦とはどういう場所であろうか。男たちは「蟹となつて海底で平和の日の送れるやうになつたことをよろこんで」いた場所であり、女たちは「陸のうえを遊び呆けることに熱中し」ていた場所だった。そこは倦怠に満ち満ちてはいるが、戦闘とはまったく無縁の平和な場所であった。海御前は、平家を滅亡へと至らせた、義経以外の源氏を長い間憎み、何とかして復讐しようとし、河童の総大将となった。その思いは七百六十年以上も続いていたが、源氏もとっくに滅び、全く違う世になったことを知り、復讐の拠点であった大積海岸を去り、平和な壇の浦へと戻っていく。すなわち、海御前は、七百年以上の歳月を経て、失望しながらも平和の重要性に気づいたのである。

五、「海御前」のテーマ

作中では、平家が滅びるきっかけになったのは、教経の嫉妬であった。教経の妻が、義経に恋をしたために、つい冷静さを失い、名将と謳われた教経でも、義経を取り逃がしてしまう。作中でも海御前は「もしあたくしの夫が義経

を生けどりにしてをりましたならば、歴史もまつたく逆転してをりましたらうか。」と述べる。歴史というのは、このように単なる偶然、そして、たわいのない理由で何とでも変わり得るものなのである。平家もかつて栄耀栄華を誇って栄えていた。源氏もまた、平家を打ち倒し、鎌倉幕府を立て、長く政事を行った。だが、すぐにそれも滅び、新しい時代に変わった。そして、その時代の変化には、それほどの重大な理由があるわけでなく、単なるくだらない偶然にすぎない。『平家物語』の冒頭にあるように、「おごれるものひさしからず、ただはるのよのゆめのごとし。たけきひともつひにはほろびぬ。ひとへにかぜのまへのちりにおなじ。」なのである。海御前は、長い間復讐をしようと企みながら、次のように他の河童や源氏一族を卑下していた。

あたくしは草や藁や魚の卵のなかから簇生したやうな卑賤の河童らとはちがつて、高貴の生まれと育ちによつて、神格にちかい通力を附与されてゐますから、低級にして通俗的な呪禁ごときであたくしの術を封じようと思つたら、大まちがひです。

（「海御前」三一八頁）

すなわち「おごれるもの」であったのだ。もしも、万が一復讐を遂げたとしても、結局は、『平家物語』の言うように、それは長続きせず、塵のようなものであったろう。そうなる前に、彼女が復讐心を捨てたことは意義深い。海御前が、昔、教経の妻として源平合戦に巻き込まれていた時は、以下のような心理状態であった。

その昔、あたくしが源氏とあらそつて、ついに力及ばず、一の谷、屋島、壇の浦と西へ西へと逃れたとき、あたくしを守つてゐてくれたのは、平家の象徴たる赤旗でした。あたくしたちはどんなに苦しい戦のときにも、敗北

と流竄の境涯におちましたときにも、宗家の旗じるし真紅のいろを見ると勇気が出ました。それははかなくもあたくしたちの一族が壇の浦の海底に沈んで亡びたのちもなお、あたくしたちの消えざる矜持として、今日まであたくしたちの全精神を支へてをるものでございます。

（「海御前」三一二頁）

この描写は、日本がアジア・太平洋戦争に参戦していた時、日の丸の旗を象徴として、戦ってきた兵士たちと、兵士と一体となり、我が国のためにと願った銃後の人々の心情を彷彿させる。戦時中、日の丸を見ると、どんなに戦時色が暗くとも「消えざる矜持」として勇気を奮い立たせたことであろう。しかし、従軍兵士たちの空しい死、日本本土の激しい爆撃、そして敗戦とともに、日本人らは打ちのめされ、そんなものは、単なる幻惑に過ぎなかったと、戦争の過ちに目覚めた。

海御前も、七百六十年間、平家のシンボルの赤旗を奉り、あがめ、精神の拠り所とし、平家を滅亡させた憎き源氏に復讐心を抱いていた。だが、仲間と思った、人民の旗の赤旗を掲げていた共産党の人々に、源氏などとっくに滅びていることを教えられ、復讐心を捨て、平和な場所、壇の浦へ行く。ここに込められた作品のテーマとは、復讐など無意味だということであろう。日本は、原爆を落とされ大きな被害を被り、侵略戦争をおこした代償と、末代までの大きな責任と贖罪を担わされた。また、多くのアジア諸国は、戦争に巻き込まれ、相当な苦しみを背負った。勝利した連合国軍も、無傷ではなかった。ずたずたにされ、やむなく愛する者を失ったり、負傷したり、人類全体が戦争で受けた傷ははかりしれない。何かを憎む気持ちも、一人ひとりにはあるはずだ。しかし、それでも復讐するということは、何の益ももたらさないということを本作品には描いているのであろう。復讐とは、憎しみの連鎖であり、無益な戦争を引き起こす引き金になるものだ。恨みよりも、安穏で平和な生活の方が人間らしい生き方であり、未来は明

るい。たとえ、戦争のような悲劇的なことを起こした罪深い人がいようとも、人が人を復讐で裁くことなどはできない。海御前の言うように、「罪とははたしていかなるものでせうか。それを断ずることは神様以外にはできない」のである。

また、海御前は、赤旗を掲げた共産党の方に協力を求められてもそれを頑なに拒んだ。これは何故であろうか。本作品が描かれた昭和二十四年までに共産党はどのようなことをしていたのだろうか。稲子恒夫は、『日本大百科全書』の「解説」で共産党の行った「粛清」について次のように記している。

本来の意味は、組織的な点検による共産党員としてふさわしくない者の党からの追放である。旧ソ連共産党は、権力についた党には内部に腐敗がおこるので、定期的な浄化が必要であるという考えにより、党規約に粛清の制度を定め、一九二一年から三六年まで何回か特別委員会をつくって全党員を点検し、党内から腐敗分子を追放する措置をとってきた。しかしスターリンが党の指導権を確立した二〇年代末から、粛清の制度は、当時の路線に批判的な者を党から追放するために利用され、混乱を招いたので、三九年の規約改正で粛清の制度は廃止された。以後ソ連では、腐敗分子の追放は規約の定める通常の手続で個別的に行われていた。

粛清は西側諸国の文献では別の意味でも用いられている。すなわち一九二〇年代から五〇年代初めまで、旧ソ連では路線、政策をめぐる論争で少数派の幹部が党と政府の要職を解任され、とくに三〇年代には当時の党規約の定める粛清の手続によらず、多数の幹部が違法に逮捕され、そのなかには殺された者が多く、同じ事態は五〇年代に若干の東欧諸国でもおき、そのため西側諸国で「血の粛清」ということばが生まれた[17]。

共産圏では、このような組織の意見と違うものを排除し、殺害する「粛清」というものが日常的に行われていた。「人民の旗」として赤旗を掲げながら、仲間内で殺し合うという矛盾した恐ろしい殺戮を繰り返していた。海御前が共産党に協力しないのは共産主義に懐疑的であるということを示すためであろう。共産党も驕り高ぶっていれば、滅びるのだと、作品を通して暗喩し、示唆しているのかもしれない。

海御前は、「すべての環境といふのがそこに棲んだり旅したりする者の主観によつて、よくもなつたり悪くもなつたりすることは、当然のことではありませんか。」とも述べる。住みやすくなるのも居心地よく生きるのもすべて人間の感じ方、思い方による。身の丈を知り、欲さえ起こさなければ戦争など起こりえなかった。さらに海御前は「歴史の真実を語るのはその歴史とともに永く生きた者の義務でございます。」とも述べる。栄枯盛衰の歴史を振り返ると、本作からは、源平合戦の顛末がよくわかる。合戦の末に、勝利した源氏も、何年か後には滅びることとなった。血で塗られ、憎しみあい殺し合った末の勝利からは何も生まれない。たとえ勝利しても、それは一時的なものに過ぎず、長続きしないことは、長い歴史の真実が明らかにしている。海御前の言葉には、平和の大切さを込めた作品の重要なテーマが内包されているのである。

終りに

本稿では、「海御前」という火野葦平の河童作品を論じた。平教経という、平家方の実在の武将の妻は、壇の浦で入水自殺をした後、北九州市門司区の大積海岸に流れ着き、河童の総大将海御前となった。本作では、この大積天疫神社にまつわる海御前伝説を背景に作品が成立していることを指摘した。また、『平家物語』巻十一「能登殿最期」の合戦を描いた箇所や、『平家物語』巻十一「那須与一」「弓流」などの場面に加筆、または改変させて、作品に使っ

ていることを論じた。海御前は、七百六十年もの長い間、平家一門を倒した源氏への復讐の機会を探っていたが、最終的には源氏はとうに滅びていることを知り、復讐することをやめ、平家一門の待つ、退屈ではあるが、平和で安穏とした地、壇の浦へと戻っていく。一見、架空の河童物語を描いたかに見える本作ではあるが、作品には、痛切な平和の希求と重要性が表現されている。復讐することの無意味さ、合戦や戦争の空しさ、おごり高ぶった勝利者の末路など、本作には、歴史の真実が語られている。「海御前」には戦後七十年以上を経た現在でも色褪せない、人類にとって切実なテーマが隠されているのだ。

注

（1）火野葦平「後書　河童独白」（『河童曼陀羅』昭和三十二年五月十日、四季社）
（2）須田元一郎「九州北部の伝説玩具」（『旅と伝説』昭和十年八月一日、第八年八号）
（3）www.kcta.or.jp/kaidou/jinzya/moji/temeki/temeki.htm
（4）火野葦平『河童漫筆』（昭和二十九年十二月十日、朋文堂）
（5）この札は和田寛編『河童伝承大事典』（平成十七年六月日付なし、岩田書院）に記されているので当時は立てられていたと思われるが、平成二十八年に、筆者が調査に行った時には撤去されていた。
（6）平家蟹については、『大辞林（第三版）』（平成十八年十月二十七日、三省堂）に「甲の凹凸が怒った人の顔のように見え、平家の怨霊が乗り移ったとの伝説を生んだ。」とある。
（7）火野葦平「三十年ぶりの門司」（『河童七変化』昭和三十二年四月五日、宝文館）
（8）平成二十九年は、七月三十日に行われた。昭和二十九年以降実に七十年以上も続いている。
（9）（7）に同じ
（10）同右
（11）同右

（12）「和布刈神社」（『門司市史』昭和八年三月三十日、門司市役所）を参照。
（13）日下力「平教経」（大津雄一・日下力・佐伯真一・桜井陽子編『平家物語大事典』平成二十二年一月二十五日、東京書籍株式会社）
（14）注13に同じ。
（15）校注・訳者市古貞二『平家物語①』『平家物語②』（平成六年六月二十日、八月二十日、小学館）の章題を用いた。
（16）北九州市編さん委員会編『北九州市史　民族』（平成元年十月一日、北九州市）
（17）稲子恒夫「粛清」（『日本大百科全書』平成六年一月一日～十日、小学館）

なお、本稿で用いた写真は全て筆者が平成二十八年に撮影したものである。